巻頭エッセイ

三浦英夫さんの死を悼む

鬼頭平三
国土交通省港湾局長

去る4月14日、前当協会専務理事の三浦英夫さんが亡くなった。つい一ヶ月半ほど前、三浦さんが例の少しはにかんだ表情を見せながら局長室にヒョッコリ現れ、この原稿の依頼がてらにお互いの近況を話し合ったばかりだったので、最初に訃報に接した時は本当に信じられなかった。あまりにも唐突で悲しい出来事に気持ちの整理もままならないが、思いつくままに三浦さんの想い出を綴ってみたい。

昭和51年7月、私は入省以来3年3ヶ月在籍した港湾局建設課から第五港湾建設局設計室（当時）に転勤した。当然ながら初めての地方勤務に加え、その年の2月に結婚し、それまで東京を離れたことのなかった家内を伴ってという、かなり不安を覚えながらの異動だった。当時、既に機械課の補佐官としてバリバリ仕事をこなしておられた三浦さんとは、私の当初の任務地が本局とは少し離れた笠寺というところにある伊勢湾水理模型実験場だったため仕事の面でのお付き合いはさほど深くはなかったが、たまたま官舎が同じだったこともあって家族ぐるみのおつきあいをさせていただいた。特に、見ず知らずの土地で生活することになった家内にとって、三浦さんの奥さんは良き相談相手の一人でいろいろなアドバイスをいただいたようだ。

当時、五建本局と名古屋港工事事務所との間に旧事務所の古い建物が残っていた。大半は資料室として利用されていたのだが、一部空いているスペースが職員の厚生施設として開放されていた。今思えば良き時代というか、おおらかな時代だったとしか言いようがないが、一室に麻雀卓が置かれていた。確か4～5卓はあったと思うが、昼休み時ともなれば「ジャンシ」を称する面々が集まり、一時間の休み時間をこれ以上有効に使うのは難しいと思うほど真剣勝負に打ち込んでいた。12時を回ってから行ったのでは観戦を余儀なくされるほどのにぎわいだったが、三浦さんも入り口に近い卓に陣取り子供のようにあどけない笑顔をふりまきながら輪の中に溶け込んでおられたのが印象的だった。（敢えて三浦さんの名誉のために正確に言うと、私がこの部屋を覗いた時たまたまその場所におられたので印象的に記憶していたというのが本当のところだ）

その後、昭和58年から60年にかけて三浦さんが港湾局機材課（後技術課）補佐官当時、私も計画課の補佐官として本省でご一緒することになったが、第7次港湾整備五箇年計画の下準備の作業など仕事の面でもいろいろとご指導をいただいたはずなのに、記憶に残っているのは、機材課のソファで酒肴をご馳走になりながらの歓談の際にも、三浦さんは「いつもニコニコ、男は黙って○○ビール」という、あるビール会社のコマーシャルを地でいくような、まさに人に好かれる酒飲みの見本のような飲み方だった点だ。

平成5年から6年にかけて務められた第四港湾建設局技術次長時代には、現在平成17年度供用を目指して整備が進められている新北九州空港の漁業補償に奔走されている。その後暫くして私自身もこの空港の整備を直接担当する北九州港湾空港工事事務所長として九州に赴任することになるのだが、私が初めての単身赴任であることを聞きつけられ、「単身生活における健康保持の秘訣は、気に入った店を見つけたら、その店と日替わりメニューの夕食を作ってもらう契約を結び、夕食は必ずそこで取るようにすることだ」とアドバイスをいただいた。なかなかその通りにはいかなかったが、人間ドックでいくつかの数値が若干上昇しただけで単身生活が解消できたのは三浦さんの忠告のおかげと今でも感謝している。

平成6年9月に運輸省を退官され、その後東京湾横断道路株式会社を経て、平成10年1月から当協会に勤務されておられた。丸っこい背中の大きな体に人なつっこい笑顔と朴訥な話しぶりで円満なお人柄とともに多くの人に愛された三浦さんが、まだまだこれからというときに旅立たれてしまったのは惜しんでも余りあるという他はない。

改めて三浦英夫さんのご冥福をお祈りするとともに、ご遺族に心からのお悔やみを申し上げて結びにかえたい。

合掌